

第18回



中之島映像劇場
NAKANOSHIMA SCREEN

—— パーソナル・ドキュメンタリーの光 ——

生存の技法



石井秀人《風わたり》

2019
11/ 9 | 土 | 10 | 日 |

国立国際美術館 地下 1 階講堂

参加無料（全席自由、先着130名）各プログラム入れ替え制 各日10:00から当日の各プログラムの整理券を配布（1名様につき1枚）

11/ 9（土）13:00・A 福田克彦《草とり草紙》 15:00・B 福田克彦《逝けなかった魂》《土の行進—三里塚—四年 青年たちはいま—》《ヒーロー伝説 ザ・カオル》

11/10（日）12:30・C 石井秀人《家、回帰》《風わたり》《光》 14:50・D 加藤治代《チーズとうじ虫》

 国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

主 催：国立国際美術館 協 賛：ダイキン工業現代美術振興財団

生存の技法

パーソナル・ドキュメンタリーの光
A Selection of Personal Documentary in Japan after the 1980s

リュミエール兄弟による発明から現在まで、映画というメディアは、大規模な予算で集団製作された商業作品の片隅で、個人的モチーフや家族との親密な時間、日常の静謐に広がる小宇宙を記録し続けてきました。本企画では、プライベートな領域にカメラを向け、連綿と受け継がれる生命の営み、その生成・消滅のプロセスを見つめた映像作家の試みに焦点を合わせます。

成田空港建設反対闘争の現場を撮影した小川プロダクションで助監督をつとめた福田克彦は、山形に移住した小川紳介たちの下から単身で三里塚(千葉県成田市)に戻り、その土地で生きて闘う人々の姿と声を記録しました。代表作《草とり草紙》を含めたその映画は、監督自身を被写体としたわけではありませんが、集団に還元されないパーソナルな存在の輝きを捉え、またカメラの背後にいる〈個〉としての福田の息遣いを刻んだ、傑出したドキュメンタリーとして位置付けられます。石井秀人は、若くしてあフィルムフェスティバル入選作《家・回帰》を発表した後、2000年まで8mmフィルムによる個人映画を断続的に撮影し、自身と家族の抜き難い関係性、あるいは事物の存在や光そのものを見据える作品を制作しました。加藤治代は、映画美学で故・佐藤真監督に師事し、癌になった母親との生活を記録した《チーズとうじ虫》を2004年に発表して、国内外の映画祭で高い評価を得ました。福田は1998年に亡くなり、現在の石井と加藤は、映画制作から距離をおいています。しかし、限られた期間にそれぞれの作家が他者に誠実なまなざしを向け、撮影・編集の過程で自らを変容させていった痕跡は、いまでも観る者に強く訴えかけるイメージとして残されています。

2019年は、ジョナス・メカスが亡くなった年としても記憶されるでしょう。メカスとその後継者たちが追求してきた日記映画の可能性、あるいは個人映画やパーソナル・ドキュメンタリーの系譜のなかで、映像制作と生きること自体の営みがどのように交わってきたか、再考する作業が求められています。



お問い合わせ
TEL: 06-6447-4680(代) <http://www.nmao.go.jp/>
〒530-0005 大阪市北区中之島 4-2-55
4-2-55 Nakanoshima, Kita-ku, Osaka 530-0005

国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

国立国際美術館では、本上映会時に次の展覧会を開催中です。
「日本・オーストラリア外交樹立150周年記念 ウィーン・モダン クリムト、シーレ 世紀末への道」
「コレクション特集展示 ジャコメッティとⅡ」
会期:2019年8月27日(火)～12月8日(日)

11月9日(土)

13:00 - A program 福田克彦

冒頭、当館客員研究員より企画の解説を行います。

《草とり草紙》(16mm [8mmブローアップ]/82分/1985年)

成田空港の第二期工事予定地に一人で暮らす84歳の染谷カツは、かつて空港建設反対闘争を闘ったシンボルの人物だった。明治・大正・昭和を生きた彼女の「自分史」が、日常の生活、草をとるリズムにのせ、19の小話に分節して語り起こされる。福田は8mmカメラを携えて、3年間その生活に密着して本作を完成させた。

※《草とり草紙》上映後には、福田克彦が晩年の染谷カツを撮影した貴重なプライベート・フィルム、《あやめ祭りー染谷カツのその後ー》をデジタル上映でご覧いただきます。



《草とり草紙》



《あやめ祭りー染谷カツのその後ー》

15:00 - B program 福田克彦

《逝けなかった魂》(8mm/16分/1980年)※デジタル上映

34歳の若さで亡くなった友人の妻の記憶を、彼女が描いてきた絵にカメラを向けて辿り直す。残された夫のインタビューを撮影した際、「初めて撮れた」という実感を持った」と福田は述べている。



《逝けなかった魂》

《土の行進ー三里塚ー四年 青年たちはいまー》(8mm/51分/1980年)

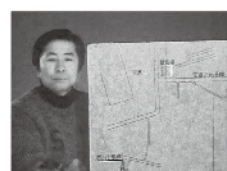
三里塚の青年行動隊のメンバーが、菱田地区の水捌けの悪い湿田を、試行錯誤しながら独自の方法で排水設備を整えていく姿を記録した作品。



《土の行進ー三里塚ー四年 青年たちはいまー》

《ヒーロー伝説 ザ・カオル》(8mm/30分/1986年)

1977年に機動隊のガス銃が頭部に直撃して亡くなった三里塚青年行動隊の東山薫。その裁判闘争を起こした友人たちと遺族らの声を聞き取りながら、彼の死から経過した時間を綴る。



《ヒーロー伝説 ザ・カオル》

11月10日(日)

12:30 - C program 石井秀人

冒頭、当館客員研究員より企画の解説を行います。

《家・回帰》(8mm/18分/1984年)

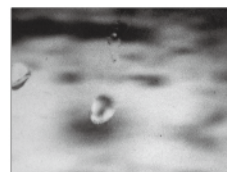
祖父が亡くなった後、祖母とその生活を支える母親の姿にカメラを向ける。避けがたい家族というテーマに取り組み、その先に見据えられた生命の連鎖へと問いを投げかけた作品。第8回びあフィルムフェスティバル入選。



《家・回帰》

《風わたり》(8mm/30分/1991年)

東北地方に通い詰めた作者は、列車の車窓からみえる風景と車内で出会った人々を撮影していく。カメラに向けた彼らのまっすぐな眼差しと対峙しながら、雪に覆われた世界を旅する。



《風わたり》

《光》(8mm/48分/1999年)

降り注ぐ木洩れ陽に覆われた画面に、フィールド・レコーディングされた音声が重ねられる。時折挿入される古い写真は、東の間焦点が合わせられ、やがてぼやけて見えなくなる。



《光》

14:50 - D program 加藤治代

《チーズとうじ虫》(DV/99分/2004年)

癌を宣告された母親との生活を続けるなか、加藤はビデオカメラを手に日常を記録しはじめる。旅行の思い出、料理と食事の様子、絵を描く姿、穏やかな祖母の表情。その生活の細部と向き合うなかで、映画は循環する生命のプロセスを浮き彫りにする。タイトルは、イタリアの歴史家カルロ・ギンズブルグの著書から取られた。2005年山形国際ドキュメンタリー映画祭小川紳介賞・国際批評家連盟賞などを受賞。



《チーズとうじ虫》

[アクセス]京阪電中之島線「渡辺橋駅」(2番出口)から南西へ徒歩約5分/Osaka Metro四つ橋線「肥後橋駅」(3番出口)から西へ徒歩約10分/JR「大阪駅」阪急電車「梅田駅」から南西へ徒歩約20分/JR大阪環状線「福島駅」、東西線「新福島駅」(2番出口)から南へ徒歩約10分/阪神電車「福島駅」(3番出口)から南へ徒歩約10分/Osaka Metro御堂筋線「淀屋橋駅」、京阪電車「淀屋橋駅」(7番出口)から西へ徒歩約15分/大阪シティバス「大阪駅前」から、53号・75号系統で、「田養橋」下車、南西へ徒歩約3分
※当館には専用駐車場はありません。ご来館は電車・バス等をご利用ください。心身に障がいのある方で、車で来館される場合は、当館近隣の有料駐車場をご利用くださいますようお願いいたします。